

沖縄県中南部地域で話されるウチナーヤマトグチにおける愛称語について

2021(令和3)年入学

言語学・応用言語学専門分野

2025(令和7)年1月提出

要旨

本論文では、沖縄県中南部地域で話されるウチナーヤマトグチにおける愛称語の命名規則と特徴について記述する。この愛称語は個人名から生成され、いかなる場合でも4モーラになる非常に規則的なものであり、沖縄県において広くみられるものだが、その具体的な法則についての研究はなされていなかった。そこで、この愛称語の内容を明らかにするために、那覇市や糸満市を含む沖縄県中南部に絞って調査を行った。愛称語は2モーラフットをテンプレートとし、元の名前をそのテンプレートに適合させていく形態音韻プロセスとして一般化できることを明らかにした。

内容

1.	はじめに.....	4
2.	調査対象と手法.....	5
2.1	調査対象の話者.....	5
2.2	調査対象地域.....	6
3.	愛称語の生成パターン.....	7
3.1	モーラ数別の愛称語生成形式.....	7
3.2	愛称語の生成パターンまとめ.....	9
4.	愛称語生成規則の分析.....	9
4.1.	愛称語のテンプレート.....	10
4.2	エレメント抽出とフット形成.....	11
4.3	愛称語形成の記述.....	12
4.4	分析のまとめ.....	14
5.	例外的な事象について.....	15
5.1	特殊なエレメント抽出をするもの.....	16
5.2	外国人名の愛称語.....	18
5.3	女性名の愛称語.....	19
5.4	名字と融合させるもの.....	20
5.5	第5章のまとめ.....	20
6.	おわりに.....	21
	参照文献.....	22
	付録.....	22

1. はじめに

本研究の目的は、ウチナーヤマトグチにおける愛称語について記述し、その命名規則と特徴を明らかにすることである。ウチナーヤマトグチとは、伝統方言である琉球語が現代日本共通語(以下、共通語)や九州方言など複数の言語と混合した接触言語である(新垣 2018)。愛称語とは、太田(2008)では「個人が本名以外に呼ばれる名前」と定義され、共通語においては以下のようなものが該当する。

- (1) a. なつみ→なっちゃん
- b. 前田健太→マエケン
- c. たけし→ジャイアン

多くの場合、a や b のように名前の接辞が切り出され、必要に応じて変形されることで愛称語が生成される。(1) a の場合では、①なつみ の”なつ“の部分を取り出し、②”ちゃん“という指小辞を補って愛称語であることを明示的にした上で、③”なつ“の”つ“が促音化する、というプロセスをとる。また、(1) b のように名字と名前のそれぞれ一部を組み合わせる例も存在する。なお、(1) c のように本名がもとになっていない愛称語については本調査の対象外とする。

ウチナーヤマトグチにおける愛称語は以下のようなになる。なお、X]Y は、あるモーラ X の直後に生じるピッチ下降を表す(韻律面の詳細については3章で後述する)。

- (2) a. なな→なー]なー
- b. けんた→けん]たー
- c. なつみ→なつ]みー

(2) では、元の名前のモーラ数が4モーラより小さい場合、母音延長が行われて4モーラの愛称語になっている。次に示す(3)では、元の名前が4モーラ以上であっても、縮約や母音延長などの操作が行われて4モーラの長さになっている。

- (3) a. かずひこ→ひー]こー、かーずー
- b. しんたろう→しん]ちゃん、たー]ろう
- c. こういちろう→こう]ちゃん

(3) a の4モーラ名”かずひこ”にも変形が行われている点から、モーラ数を4モーラにするというだけでなく、なんらかの操作が行われていることがわかる。

上記(2)と(3)を踏まえると、愛称語は元の名前の長さに関わらず4モーラになると

いう制限があり、どの名前に対しても一定の操作が行われていることがわかる。この一定の操作（縮約や母音延長など）は一般化可能なものであって、同じ人名に対して、ある特定の愛称語だけが許容され、全く許容されない愛称語もある。次の（４）に示すように、“なつみ”という３モーラ人名から生成可能な愛称語は a, b のみである。

（４） なつみ

a. なつ]みー

b. なー]つー

c. *なー]つみ

d. *なつ]ーみ

e. *なっ]つみ ……

上記の形態音韻的な操作に加え、愛称語のピッチパターンは、一部を除きほとんどが前高後低の HHLL である。愛称語生成において、この韻律的な特徴もまた無視できない重要なものであり、なぜ HHLL を好むのかという点について、説明が必要である。

本論文では、元の名を特定の「鋳型」に流し込み、そこへ特定の韻律パターンを付与するという考え方を提示していく。後述するように、本論文ではフットという韻律単位を導入することで、この「鋳型」を捉える。（４）を例にすると、“なつみ”を元にした愛称語生成は、/natumi/を 2 フットの鋳型($\mu \mu$)($\mu \mu$)に適切に流し込むプロセスによって説明できる。

（５） 入力 フット形成 長音化 アクセント付与
/natumi/ → (natu)(mi) → (natu)(miR) → (natu)](miR)

本論文では、2章で今回の調査対象と手法を明らかにし、3章で愛称語の基本的な生成パターンを記述する。4章ではフットを用いた分析を行い、5章で例外的な愛称語についてふれた後、本論文のまとめおよび今後の展望を述べる。

2. 調査対象と手法

本章では、調査対象者と調査手法、および調査地域の詳細を記述する。

2.1 調査対象の話者

本調査は、沖縄県中南部出身の話者に電話及びメールでの調査票調査を行った。電話では、変形する前の人名をこちらが提示し、話者に愛称語を解答してもらおうという手法を取った。また、調査票以外にも話者の家族や知人の愛称語を尋ねた。

話者情報は次の通りである。

	性別	生年	出身	外住歴
話者 A	男性	1973 年	沖縄県糸満市	現在は那覇市在住
話者 B	男性	1976 年	沖縄県島尻郡与那原町	18 歳まで沖縄県、以降東京都など
話者 C	男性	1976 年	沖縄県島尻郡与那原町	22 歳まで沖縄県、以降東京都

話者 A に対しては 3 回の聞き取り調査を行った。1 回目は予備調査として簡単な質問を行い、2 回目以降は実際に愛称語を生成してもらう調査を行った。それ以外にも、メッセージで詳細を確認することが何度かあった。

話者 B には対面と電話で 1 時間ほどの聞き取り調査を行い、その後メールで愛称語について尋ねることがあった。

話者 C は話者 B の知人で、話者 B を通じて質問票調査を行った。

調査する際の設定として、話者 A,B,C それぞれに同じ名前の愛称語を生成してもらい、一方で出た愛称語がもう一方で出ない場合、その愛称語について容認度調査を行うこととした。この時、「自ら使う」を OK、「自分は使わないが聞いたことはある」を (OK)、「自分は使わないし聞いたことがない」「使わない」というものを NG とした。調査した愛称語については、個人が特定されない形で本論文の付録として記載する。

2.2 調査対象地域



上は沖縄県の中南部の地図である（国土地理院の図を用いて筆者作成）。沖縄県中南部の人口は 1 0 0 万人を超えており、沖縄県の全人口 1 4 6 万人中の約 4 分の 3 を占めている。那覇市だけでも 3 0 万人おり、沖縄県中南部が人口密集地帯であることが伺える。

沖縄県では過去方言の弾圧が行われた歴史があり、以降も標準語への馴化が進んでいた。その結果、伝統方言である琉球語と標準語の融合が進み、一般に「沖縄弁」や「沖縄訛り」と呼ばれるウチナーヤマトグチが発達した。狩俣（2006）では、「沖縄、奄美地方の多くの人

は琉球語を理解できないか、少しわかる程度」であり、伝統方言を体系的には所持していないと考えているが、「若い人の言葉には音韻・意味・統語の各カテゴリに琉球諸語の影響が見られ、これらをウチナーヤマトグチ、または沖縄共通語と呼ぶ」と定義している。次の3章では、この言語における愛称語のパターンを記述する。

3. 愛称語の生成パターン

愛称語、または愛称(hypocorism)に関する研究は、ウチナーヤマトグチに関しては皆無であり、共通語に関しても非常に少ない。太田(2008)では愛称語の形成パターンを明らかにしたうえで日英語における愛称語を比較しているが、ウチナーヤマトグチの愛称語形成に関して示唆的な言及や一般化はなかった。そこで、本論文では様々な愛称語パターンを観察しながら、一般言語学的な諸概念を用いつつ、当該現象を記述することを目的としている。

愛称語は慣習で決まる側面もあるが、話者によっては「自分はその愛称語は思いつかなかったが、それを聞いても違和感はない」「その愛称語は絶対に容認できない」という内省がはっきりしており、さらに、新規の名前を提示しても母語話者の生成する愛称語が一貫していることから、何らかの共時的な規則による生成が生じていることは確実である。本論文の目的はその規則の提示であり、次章において議論していくことになる。本章ではその前に、実際にどのような愛称語が見られるかという点を確認するために、もとの名前のモーラ数ごとに可能な愛称語のパターンをみていく。全ての愛称語は4モーラであり、また愛称という性質から、名字ではなく下の名前をベースに生成されるのが一般的である。愛称語は原則HHLLのピッチパターンになるが、ごくわずかな愛称語は平板パターンも認められる場合がある。

3.1 モーラ数別の愛称語生成形式

以下の表1~4は、愛称語の生成について、元の名前が2~5モーラのそれぞれの場合に分けてまとめたものである。なお、表における数字は名前の1モーラ目から順番に振ったものであり、矢印の左は元の名前、右は生成された愛称語を指す。Rは長音を意味する。指小辞とは、親しみをこめる接尾辞で、「ちゃん」や「ぴょん」、「ぼう」などいくつかのヴァリエーションを持つ。すでに述べたように、X]YはモーラXの直後のピッチ下降を示す。表1では、「りな」から/riRnaR/という愛称語が、「しょう」から/syoRtyaN/という愛称語が形成されることを例示している。

表1 元の名前が2モーラの場合の愛称語派生

2モーラの場合	愛称語の派生	例
形式A	1 2 → 1 R 2 R	rina → riR]naR
形式B	1 2 → 1 2 + 指小辞	syou → syoR]tyaN

表1のように、元の名前が2モーラるとき愛称語は形式AとBの2つを取る。特に名前の2モーラ目が特殊モーラ（長音、撥音）の場合、全て形式Bになる。これは音節境界が関係していると考えられ、第4章で詳しく考察する。形式Bは汎用性が高く、全ての2モーラ名が形式Bになりうるが、話者によると多くの場合幼児語のような感覚があるため形式Aを生成可能な場合はそちらが優先されるという。

表2の形式Cに従って作られた愛称語は平板アクセントになる場合があることが分かったが、この愛称語に一般的な前高後低アクセントの方が容認されやすかった。話者の内省として、同じ名前の二人をアクセントによって呼び分けるということは無かった。

表2 元の名前が3モーラの場合の愛称語の派生

3モーラの場合	愛称語の派生	例
形式C	1 2 3 → 1 2 3 R	takuya → takuyaR
形式D	1 2 3 → 1 R 2 R	kazuko → kaR]zuR
形式E	1 2 3 → 1 2+指小辞	KoRji → koR]tyaN
形式F	1 2 3 → 1 R 2 3	taroR → taR]roR

形式D、Eの構造はそれぞれ表1の形式A、Bの構造と同一である。このことから、3モーラの名前の2モーラ目までを見た時、それが名前のようになっていた場合に形式D、Eが適用されやすいことがわかった。形式Fは3モーラ目に特殊モーラ（長音、撥音、促音）がある場合のみに起こる変化である。4章で詳しく述べるように、フット境界と音節境界が一致しなければならないという制限が関わっており、形式Fはそれを回避する手段であると解釈できる。例えば、/taroR/をそのまま左から2モーラフットに切ると*(taro)Rのような、音節がフット境界を跨ぐ結果になる。これを避けるために、右からフット形成し、(ta)(roR)を作った後、/ta/を長音化する。

表3の形式G、Hは名前の2文字目までを見るという点で形式D、Eと同一であり、実際の形もそれぞれ形式A、Bと対応している。しかし、名前の3モーラ目までを切り取って形式Cのようにしたと思われる愛称語は見られなかった。

表3 元の名前が4モーラの時の愛称語の派生

4モーラの場合	愛称語の派生	例
形式G	1 2 3 4 → 1 R 2 R	daisuke → daR]iR
形式H	1 2 3 4 → 1 2+指小辞	keNsuke → keN]piR
形式I (特殊)	1 2 3 4 → 3 R 4 R	kazuhiko → hiR]koR

形式Iは、kazuhiko → kaR]zuR という愛称語が予想されるが、実際は3・4モーラ目を用いて/hiRkoR/となる。これは、話者の内省によると、/kaRzuR/が女性名「かずこ」「かずみ」などを想起させるため、後続の「ひこ」の部分で愛称語を生成したものである。このよ

うな愛称語生成は元が男性名である場合にしか起こらない。このことについても第4章で記述する。

表4のように、5モーラ以上の名前は形式J, Kをとることが多く、いずれも形式A, Bと対応する形になっているが、形式Lのような”〇〇たろう”、”〇〇じろう”といった名前は形式Fのように後部の”たろう” ”じろう”を用いて”たーろう”や”じーろう”とするパターンも見られた。ただ、5モーラ以上の名前は例が少ないことや、形式J, K, Lのいずれも5モーラ以上の名前に固有の現象ではないことから、今回の研究においては取り上げない。

表4 元の名前が5モーラのとときの愛称語の派生

5モーラ以上の場合	愛称語の派生	例
形式J	1 2 3 4 5 → 1 R 2 R	takenosiN → taR]keR
形式K	1 2 3 4 5 → 1 2 + 指小辞	ainosuke → ai]tyaN
形式L	1 2 3 4 5 → 1 2 3 R	kentaroR → ken]taR

3.2 愛称語の生成パターンまとめ

3章1節で示した愛称語生成の様々な有り様を踏まえて、愛称語の生成パターンを表5にまとめる。

表5 愛称語の生成パターン

パターン番号	モデル	特徴
パターン1	1 R 2 R	汎用的
パターン2	1 2 + 指小辞	汎用的
パターン3	3 R 4 R	特殊な状況のみ
パターン4	1 2 3 R	奇数モーラ名のとき
パターン5	1 R 2 3	3モーラ目が特殊モーラのとき

生成された愛称語は基本的に上のパターンに従い、生成可能なパターンが全て生成される。このパターンを満たさない特殊な愛称語については、第5章で例外的な愛称語として言及する。続く第4章では、上記のパターンを参照しながらフットを基底とした分析を行う。

4. 愛称語生成規則の分析

本章では、愛称語がどのように生成されるかを分析する。ここまでで示したように、この愛称語は4モーラからなり、元の名前を入力に、特定のパターンに従って作られている。以下では、そのパターンを定式化するため、フットという単位を導入して分析していく。本論文で用いるフットは2モーラからなる韻律単位である。

4.1. 愛称語のテンプレート

愛称語は以下のような決まった構造（テンプレート）を持つ。

(5) 愛称語 = $(\mu \mu)(\mu \mu)$

ただし $\mu = 1$ モーラ、 $(\mu \mu) = 1$ フット

なお、フット形成はデフォルトでは左から右へ行われ、余りのモーラを残さないように行われる。例えば 3 モーラ語の /takesi/ は、左から右へのフット形成によって /si/ が残るが、これを余りにせず、/si/ の長音化が生じて 2 フット目になり、/takesiR/ という愛称語が形成される。

フット形成がデフォルトの左から右へ、ではなく、右から左へ行われる場合もある。これは、フット境界と音節境界が一致しなければならないとする規則によるものである。この規則を無視して /taroR/ からフットを形成すると、(taro)R となってこの制限に違反する。よって、フット形成が右から左へ行われ、ta(roR) となり、/ta/ が長音化して /taRroR/ となる。同様に、/kanaN/ に対してもこの規則がはたらき、フット形成が右から左に行われて ka(naN) となり、/ka/ が長音化して /kaRnaN/ となる。

上記のようにフット形成では音節境界を積極的に保持しているとみられ、それを示す例を以下に示す。(i) は比較のための 3 モーラ 3 音節名で、(ii)(iii) は 3 モーラ 2 音節名である。

(i) かずこ → かず]こー、かー]ずー
/kazuko/ → a. {kazuko} → (kazu)(ko) → (kazu)(koR)
b. {kazu} → (ka)(zu) → (kaR)(zuR)

(ii) りんか → りん]かー、*りーんー
/riNka/ → a. {riNka} → (riN)(ka) → (riN)(kaR)
b. {riN} → *(ri)(N)

(iii) ゆうき → ゆう]きー、*ゆーうー
/yuRki/ → a. {yuRki} → (yuR)(ki) → (yuR)(kiR)
b. {yuR} → *(yu)(R)

(i) では、“かずこ” という名前に対して 2 つの愛称語が与えられている。1 つは (kazu)(ko) と分けて後部の (ko) に長音を補うことで 2 フットを満たす “かずこー” (kazu)(koR) とするものと、もう 1 つは名前の前部 (kazu) のみを取り出してそれぞれを母音延長する “かーずー” (kaR)(zuR) というものである。

対して(ii), (iii)では、名前の後部を母音延長する形は認められるが、前部1フットを音節境界で分割して母音延長する形は認められない。名前の前部を変形すると、それぞれ(riN)と(yuR)という音節を分割することになってしまい、フット境界が音節境界を跨ぐことになるからである。愛称語パターン④の123Rの形を取る点において(i) (ii) (iii)の3つは同一に思えるが、(i)では容認された愛称語パターン①の1R2Rの形を(ii) (iii)では選択しないことから、愛称語生成において音節境界を保持する強制力がはたらいっていることが分かる。

愛称語のフット構造のうち、第一フットにH、第二フットにLトーンが付与される。結果的にフット境界でピッチが下降する。上の例では、(take)(siR)が以下のようにトーン付与される。

(6) (take)_H (siR)_L

4.2 エレメント抽出とフット形成

愛称語のフット形成においては、以下の2つのプロセスが関わっている。第一段階はテンプレートに流し込む要素の抽出、第二段階はその要素を用いたフット形成である。元の名前を愛称語生成における「入力」、このうち愛称語テンプレートに流し込む要素を「エレメント」と名付ける。1つの入力から抽出されるエレメントは①名前全体と②部分エレメントの2つである。②の部分エレメントとは、それだけで元の名前を復元できるようなエレメントのことで、基本的に語頭1フットが該当する。以下の表6におけるエレメントは{takesi}と{take}の2つである。窪菌(2002)では、「語の最初の部分にその語を同定する情報が多く含まれている」と説明され、これに「復元可能性」という用語を与えている。なお、後述するように、語末1フットとなる場合もある(例:kazuhiko→{hiko})。

表6 愛称語生成の手順

元の名前→ {エレメント} 抽出	→ フット形成	→ 長音化	→ 完成した愛称語	
たけし	{takesi}	(take)(si μ)	(take)(siR)	たけ]しー
	{ta.ke}si	(ta μ).(ke μ)	(taR)(keR)	たー]けー

第二段階ではこれらのエレメントのどちらかを選択し、愛称語を作るためのフット形成が行われる。{takesi}というエレメントを選択した場合は(take)(si)のようにフットが分割されていると考え、後部の(si)を母音延長させることで(take)(siR)という愛称語を生成する。{take}というエレメントを選択した場合は、愛称語生成パターン①を満たすためにそれぞれを再度音節境界で分割して母音延長させることで(taR)(keR)とするか、フットを保持したまま後部に新たな指小辞を補って(take)(tyan)とする。どの人名もモーラ数に関わらずこの操作が行われており、/takesi/の愛称語として*たーしー や *けーしー が選択されないのはエレメント抽出の段階で*{tasi}や*{kesi}が排除されているためである。

第4章3節では、この2段階の愛称語生成モデルを使って実際にいくつかの愛称語を検討する。

4.3 愛称語形成の記述

(7) では、/satosi/という名前に対して愛称語生成が行われ、まず {satosi} と {sato} の2種類のエレメントが抽出されている。

(7) さとし→さと]しー

{(sato)(si)} →(sato)(siR)

さとし→さー]とー

{(sa.to)} si→(sa).(to)→(saR)(toR)

{satosi} というエレメントは(sato)と(si)の1フットと1モーラで構成されており、後部の(si)が1フットに満たないことから、(siR)のように母音延長して2フット4モーラの制約を満たす必要がある。もう一つの {sato} というエレメントは1フットのみから成り、愛称語を生成するためには再度このエレメントを音節境界で分割して(saR)(toR)のように母音延長するか、(sato)(tyan)のように指小辞を補って4モーラを満たさなくてはならない。なお、この調査は全て成人を対象としたものであり、第2章2節におけるパターン1 (1R2R) とパターン2 (12+指小辞) が共起する場合のパターン2は幼児語に準ずる用法であるため、これ以降の分析では取り立てて言及しないものとする。

(8) では、/mitutaka/と言う名前に愛称語生成が行われ、{mitutaka}というエレメントが抽出されている。

(8) みつたか→みったか

{(mitu)(taka)}→(mitu)(taka)→*mitukata

{(mitu)(taka)}→(miQ)(taka)→mittaka

このエレメントから従来のパターンで愛称語を生成しようとすると、既に(mitu)(taka)というように2フットが出来ており、これ以上母音延長することができない。この愛称語*/mitutaka/は元の名前と同形であり、愛称語としては容認されない。そのため、1フット目の(mitu)の/tu/を促音に置き換えることで、/miQtaka/という同形生成を回避した愛称語が生成できる。このように、同形生成の禁止制限はフット形成の後にかかり、それを回避する形態音韻規則が適用されると考える。

(9) では、{kazuhiko}というエレメントから生成される愛称語が同形生成禁止の規則によって拒否された結果{ka.zu}が選択され、それを音節で分割して母音延長した(kaR)(zuR)という愛称語が生成される。しかし、愛称語としての/kaRzuR/は習慣的に”kazuko”や”kazumi”

のような女性名に対して用いられるという言語外的な要因によって容認度が低くなる。そこで、語末フットのエレメント{hiko}が抽出され、愛称語は(hiR)(koR)となる。

(9) かずひこ→かー]ずー

{(ka.zu)}hiko→(ka).(zu)→(kaR)(zuR)

かずひこ→ひー]こー

kazu{(hi.ko)}→(hi).(ko)→(hiR)(koR)

このような言語外的要因による愛称語の再検討の例は一定数あり、{kazu} や {masa} などが代表的なフットとしてエレメントになった場合、愛称語が女性名を想起させるという理由で一度リジェクトされ、もう一方のフットがエレメントとして抽出される。なお、先に述べたようにこのとき優先的に選択されるエレメントは既に完成している他のフットであり、/kazuhiko/のうち (zuhi) や (kako) が取り出されて /zuRhiR/ や /kaRkoR/ になるパターンは見られなかった。これは形態素境界が関係しているとみられ、(kazu) と (hiko) は元の名前(和彦、一彦)の形態素境界と一致しているためエレメントとして選択されやすいと考えられる。

(10) では、“たろう”という名前に対してフット境界での分割が行われ、{taroR} と {taro} の2つのエレメントが抽出される。

(10) たろう→たー]ろー

a. {(ta.ro)}R→(ta).(ro)→(taR)(roR)

たろう→たー]ろー

b. {taroR}→(ta)(roR)→(taR)(roR)

/taroR/→ a. {taro}→(ta)(ro)→(taR)(roR)

b. {taroR}→(ta)(roR)→(taR)(roR) 下記 c が容認できないため語末からフットを切り直す。

c. {taroR}→*(taro)(R) 特殊モーラが孤立しているため不適。

名前全体をエレメントとした {taroR} に着目すると、そこからフットを形成する際、左から右へ(taro)(R)とするのではなく、右から左へ(ta)(roR)というふう形成されている。これはフット境界と音節境界が一致しなければならないという第4章1節で述べた制限によるものである。cのように左から右にフット形成を行うと、特殊拍である長音Rが孤立して愛称語が生成できない。もう一つのエレメントである(taro)からは(taR)(roR)と(taro)(tyan)が生成されうるが、前者は発音の都合で{taroR}から生成される愛称語(taR)(roR)と区別されない。そのため、(10)ではaとbのどちらの操作によって愛称語が生成されているか判断できないが、次の(11)によって両方の操作が同時に起こっている

ることが示せる。

(11) かなん→かーなん

$\{(ka)(naN)\} \rightarrow (kaR)(naN)$

かなん→かー]なー

$\{(ka.na)\}N \rightarrow (ka).(na) \rightarrow (kaR)(naR)$

- a. $\{kanaN\} \rightarrow *(kana)(N)$ 第二フット左端が特殊モーラになるため不適。
- b. $\{kanaN\} \rightarrow (ka)(naN) \rightarrow (kaR)(naN)$ 上記 a が容認されないため、語末からフット形成をやりなおす。
- c. $\{kana\} \rightarrow (ka)(na) \rightarrow (kaR)(naR)$

この/ $kanaN$ /という名前に対してエレメント抽出を行うと、 $\{kanaN\}$ と $\{kana\}$ の2つになる。ここで、1つ目のエレメント $\{kanaN\}$ に対してフット形成を行うとき、 $(kana).N$ とすると naN という1音節を分割することになってしまうので、この場合も $ka.(naN)$ のように音節境界を保持したフット分割とする。その後、 ka の部分を母音延長することで $(kaR)(naN)$ とし、2フット4モーラの愛称語を生成する。

4.4 分析のまとめ

愛称語を作るときには2段階の過程があり、第一段階をエレメント抽出、第二段階を愛称語生成と定義した。

第一段階のエレメント抽出では、復元可能性の高い①名前全体と②代表的なフットの通常2つが選ばれる。元の名前が5モーラ以上の場合には②のみが抽出される。

第二段階のフット形成では、2モーラ2音節のエレメントには母音延長と指小辞の追加が行われ、2モーラ1音節のエレメントには指小辞の追加のみが行われる。また、3モーラ3音節のエレメントには名前の前部からフット分割を行い、3モーラ2音節のエレメントには音節境界を保持したフット分割が行われる。その後、余った1モーラが母音延長され、2フット4モーラの愛称語となる。①で抽出された4モーラのエレメントに対しては(8)のように同形生成を回避する派生が見られるが、その余地がない場合は②のエレメントから生成された愛称語のみが容認される。

ここまですを図式に示すと以下のようなになる。

エレメント抽出	→	フット形成	→	音韻調整
名前が5モーラ以上: 部分抽出		制限1: 音節を跨がない		長音化
名前が5モーラ未満: 部分抽出、全体抽出		制限2: 空のフットを作らない		促音化 etc

第一段階は機械的な処理であるのに対し、第二段階ではいくつか守らなくてはならない規則がある。以下に箇条書きで記述する。

- ① 愛称語の全体が2フット4モーラになる。
- ② ①に関連して、フットに満たない余りの1モーラ (Stray) が残らないようにする。
- ③ 名前と愛称語が同じになることを避ける。(同形生成の禁止)
- ④ フット境界が音節境界と一致している。
- ⑤ フットを左から順に取り出す。

この法則が愛称語に適用されていることを以下の(12)で示す。

(12) ことみ→こと]みー、(a)*こーとみ、(b)*ことーみ、(c)*みーこと、(d)*ことみ

これらの愛称語は(d)以外すべて4モーラだが、“ことみ”という名前に対して容認された愛称語はことみー/kotomiR/のみであり、残りの4つはいずれも容認されなかった。理由として、(a)はこーとみ(koR)(tomi)となっており、⑤に反しているからだと考えられる。(b)も(koto)(Rmi)となっており、特殊モーラRが後部のフットにあることから、(toR)という音節を跨いでおり、実態としては(ko)(toR)(mi)となることから④に反している。(c)は⑤を満たしておらず、一般的な愛称語ではないものの/mikoto/という別の名前が想起されることから容認性が低いと考えられる。(d)は①~④に違反している。次の(13)でも検証する。

(13) まりん→まーりー、(d)まー]りん、(e)*まりーん、(f)*まりんー

これらの愛称語も全て4モーラの条件を満たしているが、(e)は(mari)(RN)となって音節を跨ぐことから④を満たしておらず、(f)も(e)と同様に(mari)(RN)となって④を満たさないことから不適である。(d)の/maRrin/は⑤を満たしていないが、それ以外の愛称語がより上位の規則を満たしていないことから、まーりー/maRriR/の次に適しているものとして選択されている。このように、愛称語生成規則の①~④は厳守しなくてはならないものだが、⑤は他の規則を守るためであればある程度柔軟に逸脱できる。

以下の第5章では、ここまでで明らかにした一般化では説明できない特殊な現象について述べる。

5. 例外的な事象について

本章では、ここまで述べた愛称語のパターンや生成規則から逸脱する例外的な愛称語について記述する。大きく4つあり、以下に示す。

- ① 特殊なエレメント抽出をする人名
- ② 外国人名の愛称語

③女性名の愛称語

④名字と融合させるもの

これら4つの特殊な内容について、1つずつ節を立てながら分析する。

5.1 特殊なエレメント抽出をするもの

第4章で分析したように、愛称語を作るときはまず名前を参照し、愛称語になる素材であるエレメントを抽出する。エレメントは通常2つで、名前全体か特定の部分が選ばれる。後者の場合、普通は連続する2モーラ（すなわち1フット）が選ばれるが、非連続の2モーラが選ばれることがある。（14）は、連続する部分/mayu/が抽出される例であるが、（15）は/ma__mi/が選ばれている。

(14) まゆみ→まゆ]みー
{(mayu)mi}→(mayu)(miR)
まゆみ→まー]ゆー
{(ma.yu)}mi→(ma).(yu)→(maR)(yuR)

(15) まゆみ→まー]みー
ma.yu.mi→(ma).(mi)→(maR)(miR)

第4章で「一度作った愛称語の容認度が低い場合、エレメントが再抽出される場合がある」と述べたが、（14）で示した愛称語の”まゆみー”と”まーゆー”はいずれも容認されやすい。むしろ間のモーラを脱落させた愛称語の方が容認度が低く、話者間の評価が分かれがちで、新たにエレメント抽出が起こる理由は不明である。

このような例はいくつかあり、どれも間の1文字が脱落する形をとる。

(16) ・あゆみ→あー]みー
・まなみ→まー]みー
・りさこ→りー]こー
・りやこ→りー]こー

これらの愛称語に共通するのは、どれも元が3モーラ名で1R3Rの形になること、そして1モーラ目と3モーラ目を見た時に/ami/, /mami/, /riko/ というような女性名になることである。後の第5章3節で詳しく述べるが、女性名は男性名に比べてパターン①の1R2Rの愛称語を取りやすいことが調査で分かっている。そこで、元の名前の1モーラ目と3モーラ目を取り出した時に2モーラの普遍的な名前になる場合、その2モーラ名の愛称語を元の名前の愛称語として援用することがあると考えた。

先ほど述べた通り、非連続エレメントの抽出による愛称語は人によって容認度の差があり、また語によっても容認度の差がある。例えば、上の/riyako/と/risako/はどちらも

/riRkoR/という愛称語を取るが、後者/risako/の方が容認度が低い。また、/mayumi/と/manami/の愛称語はどちらも/maRmiR/となるが、後者/manami/の方が容認されにくかった。このように、名前の途中にヤ行がある場合、上記の援用とは別にヤ行がエレメントになりにくいことがわかった。このことから、ヤ行音の音声的な特性がエレメント抽出において特殊に振る舞うという可能性がある。実際、ヤ行音は他の子音と違って渡り音であり、通常のCVモーラとは違った音韻的振る舞いをして不思議ではない。

しかし一方で、愛称語生成において名前の途中のヤ行を条件なく脱落させられるわけではない。例として、男性名の/ayumu/では、愛称語は/ayumuR/と/aRyuR/の2つが容認され、/*aRmuR/は容認されなかった。これは/aRmuR/の元になると推測される/amu/という名前が一般的でないことが理由だと考えられる。

特殊なエレメント抽出の例として5モーラ以上の名前がある。傾向として、5モーラ以上の名前は”〇〇たろう”や”〇〇のすけ”のような複合語になりやすいため、エレメント抽出もそれを踏まえた特殊な振る舞いとなる。具体例を示す。

(17) けんたろう→けん]ぴー

{keN}taroR→(keN)(piR)

けんたろう→たー]ろう

keN{ta.(roR)}→(taR)(roR)

けんたろう→けん]たー

{(keN).ta}roR→(keN)(taR)

/kentaroR/に機械的なエレメント抽出を行うと {keN} と {tarou} の二つが取り出されるが、それとは別に {keNta} という別のエレメントも選択される。名前の中に他の名前を想起させる文字列があった場合、その部分がエレメントとして選択され、それがもとの名前の愛称語として選択されるというものである。このことから、”〇〇たろう”や”〇〇じろう”という名前は”〇〇た”や”〇〇じ”という名前の愛称語で呼ばれる可能性が高いと言える。

”〇〇のすけ”という名前についても同様で、規則通りのエレメントとは別に {suke} という接辞が取り出されて/suRkeR/という愛称語を取ることが多い。この理由は2つ考えられる。1つは5モーラ以上の名前がエレメント抽出の際に名前全体をエレメントにできず、4モーラ未満の名前と比べて愛称語の絶対数が少なくなるため、その数を増やすために意図的にエレメントの個数制限を緩くしているというものである。もう1つは、単純に名前の文字数が多いとエレメントに出来る文字の組み合わせが増え、結果として愛称語が増えているというものである。この2つは対立しているが、5モーラ以上の名前の絶対数が少ないこともあり、データが不足していて本論文では結論を出すことができない。しかし、後者のようにエレメントにできる組み合わせが名前の文字数によって有意に増

えるのであれば、3モーラ名や4モーラ名の際にその変化が観測されるはずなので、現時点では前者が優勢であると考えている。

5.2 外国人名の愛称語

ここまですべて典型的な日本人の名前を挙げてきたが、愛称語生成規則は外国人名にも適用できる。この愛称語生成は日本人名の何らかの特徴にのみ適用するようなものではなく、普遍的な人名の特徴に対して適用されるものだからである。以下で外国人名の愛称語について記述する。

この愛称語規則は外国人名についてもほぼ同じで、2フット4モーラの制限や同形生成の禁止などは変わらない。具体例を挙げると、以下のようになる。

(18) ドナルド→どーなー

{(do.na)}rudo→do.na→(doR)(naR)

(19) ハンユー→はんちゃん

{(haN)}yuR→(han)(tyan)

このように、明らかに日本語的な名前でなくとも、規則通りエレメントを抽出して愛称語を生成できることが分かる。しかし、外国人名の中には通常の規則だけでは愛称語を生成できないため、追加の変形をするものがある。それは、名前に促音が含まれる場合と超重音節が含まれる場合である。

日本人名において促音は(小林)一茶や一休などわずかな例にしか見られず、名前に入ることはほぼ無い。しかし、英語圏の人名だと"Max"や"Ricky"などのように、日本語に比べてはるかに頻繁にみられる。このとき、愛称語生成では促音を長音に置き換えることが多い。

(20) マックス→まっくー

{maQku}su→(maQ)(kuR)

マックス→まーくー

{maQku}su→(ma)(ku)→(maR)(kuR)

マックス→まーぼん

{maQ}kusu→(maR)(poN)

この例ではどれも名前の前部をエレメントとして取り出して変形しているが、下2つは愛称語生成の段階では促音が長音に変化しているように見える。これはエレメント抽出の際に特殊モーラをスキップしていると考えられ、以下のような抽出が起こっているとみられる。

{maQ}→*(ma)(Q) 音節を跨ぐため不適。

*{maQ}() 空のフットが出来るため不適。

{maQ}(tyaN) 指小辞を補って愛称語を生成。

{maku}→(maR)(kuR)

同様の変化はつぎの(21)でも発生する。

(21) ジャック→じゃーくー

{zjaQku}→(zjaR)ku→(zjaR)(kuR)

{zjaku}→(zja)(ku)→(zjaR)(kuR)

この(21)も(20)と同様に促音が長音に変わっているが、/jaQkuR/という愛称語も同じくらい容認される。普段は/maQkuR/や/jaQkuR/と発音されていたものが発音上の都合で変化し、現在では/maRkuR/、/jaRkuR/と呼んでも容認されやすくなったのではないかと考えられる。

また、日本人名にはない外国人名として、超重音節を含む名前がある。例としては、"Shaun" (ショーン)や"Jane" (ジェーン)が挙げられる。これらの1音節3モーラの名前の愛称語を作る場合、名前全体をエレメントとした愛称語ではフット境界が音節境界を跨ぐものしか作れない。

(22) ショーン→*しょーんー

{shoRN}→(shoR)(NR)

ショーン→しょーちゃん

{shoR}N→(shoR)(tyan)

たとえば、元の名前が"ショーン"の場合、愛称語生成のためにフット分割しようとする(shoR)Nもしくはsho(RN)のいずれかになってしまい、音節境界を保持できない。このことから、エレメント抽出では(shoR)とし、(shoR)に何らかの指小辞を補うことで愛称語としている。

以上のように、外国人名には日本人名にはない特徴があるため、それを踏まえた特殊な変形を行うことがわかった。

5.3 女性名の愛称語

この愛称語には性差があり、男性名と女性名の両方に用いることのできる名前には愛称語で男女の区別をつけることがある。たとえば、"あきら"という名前は男性にも女性にも使える中性的な名前だが、

(23) あきら→あきらー

(24) あきら→あーきー

という2つの愛称語があった場合、話者の内省では(23)が男性名で(24)が女性名だと解釈される。また、4章3節(9)のかずひこ→ひーこーでも言及したように、本来生成される愛称語が女性名を想起させることから、違う愛称語が最適として選択されることがある。つまり、 $(\mu R)(\mu R)$ の形は女性名の愛称語として見られやすく、男性名の愛称語では避けられる傾向がある。

実際に $(\mu R)(\mu R)$ の形は女性名の愛称語に多いのだが、生成規則から容易に作られやすく、どのモーラ数の名前でもよくみられるものなので、話者の内的感覚の占める部分が大きいと考えられる。今後データを収集し、女性名の愛称語における特徴や男性名と比べた際に有意差のある部分を見つける必要がある。

5.4 名字と融合させるもの

これは直近の調査でわかったものであり、名字の2モーラと名前の2モーラを足して4モーラとする愛称語である。ただ、これは“キムタク”や“マエケン”のように標準語でもしばしばみられる現象であり、沖縄県中南部に限定される現象とは考えにくいので、本研究の分析対象とせず、紹介のみに留める。

5.5 第5章のまとめ

特殊なエレメント抽出が行われる愛称語や女性名の愛称語に関連して、既存の法則を逸脱した場合に制約無く愛称語が生成されるのではなく、典型的な愛称語の型があり、それに合致するような愛称語生成が行われると考えられる。理由として、女性名の愛称語生成において2モーラ目が脱落する現象では、すべて $(\mu R)(\mu R)$ のパターン①の形になっていることが挙げられる。このことは、愛称語は無尽蔵に生成されるわけではなく、例外であっても大きく形を変えないことを意味している。

また、外国人名や女性名の愛称語について述べたが、これらの愛称語はデータが少なく、これから分析していく上で新たな規則や特徴が発見される可能性はある。しかし、調査した限り既存の愛称語生成規則を大きく逸脱するものは見つからなかったため、ほとんどは規則通りに作用すると考えられる。

ここで紹介した愛称語以外にも、特定のコミュニティや閉鎖的な関係でのみ呼ばれる特殊な愛称語も存在するが、調査対象が膨大になってしまうことや調査結果の汎用性がないことを考慮して今回の調査対象とはしなかった。

6. おわりに

ウチナーヤマトグチにおける愛称語についてまとめる。

この愛称語は人の名前、特にファーストネームに対して用いられ、例外なく4モーラになる。愛称語生成に関する話者の内省が一致しており、ウチナーヤマトグチ話者であれば一様に同じ愛称語を生成できると考えられる。

この愛称語生成には2つの大きなプロセスがあり、1つは愛称語になる要素(エレメント)の抽出、もう1つはその要素からフットを形成するものである。エレメントは名前全体か名前から代表的なフットを取り出したものになる。第二段階のフット形成には、2フット4モーラの制限、同形生成の禁止、音節境界の保持という厳密なルールがある。これを満たさない愛称語は容認性が極めて低く、まったく容認されないか、他に候補がない場合に消去法で選ばれる程度になる。

愛称語の中には、上記規則だけでは生成できないものもある。多くの場合は元の名前Aの中により短い名前A'が含まれており、A'の愛称語を生成することでAの愛称語とすることができる。それ以外の名前については、適宜名前を参照して典型例におさめることが必要である。

今後の課題は、女性名および外国人名の愛称語の一般化である。話者の内省では愛称語の男女区別が明確であるにもかかわらず、形態的な差異を見つけることが出来なかった。今後調査を重ねる上で、言語内的要因による理由を発見したいと考えている。

また、外国人名についてはイングリッシュネームが主となる調査であったので、アジア系やアフリカ系など他の地域の名前についても調査する余地があると考えられる。

参考文献

- 新垣李加子(2018) 「言語接触論からとらえるウチナーヤマトウグチの分類」東京都立大学
研究論文, p33
- 太田正之(2008) 「日英語における愛称語について」『県立新潟女子短期大学研究紀要』
45:p167-173
- 狩俣繁久(2006) 「沖縄若者ことば事情」『日本語学』明治書院, p50-59
- 窪蘭晴夫(2002) 『新語はこうして作られる』岩波書店, p82-111

付録

付録には、調査で使用した名前とその愛称語を記入する。愛称語ごとに容認度の差がある場合や、特筆すべき事項は備考に記入する。

名前	愛称語	備考
さとし	さと]しー、さー]とー	
まこと	まこ]とー、まー]こー	まーこーは女性的
だいすけ	だー]いー、だい]ちゃん	
たつや	たつ]やー、たー]つー	たーつーは幼児語
たくや	たく]やー、たー]くー	
たいし	たい]しー	
たかし	たか]しー	平板で発音される場合もある
しょう	しょう]ちゃん	しょう+指小辞の形をとる
しょうた	しょう]たー	
しょうじ	しょう]じー	
りょうた	りょう]たー	
あつし	あつ]しー、あっ]ちゃん	
りょうか	りょう]かー、りょっ]かー	
まなぶ	まな]ぶー、まん]ぶー	
なおき	なお]きー	平板で発音される場合もある
まさる	まさ]るー、まー]さー	
たける	たけ]るー、たー]けー	
ゆうすけ	ゆっ]ぴー	ゆう or ゆっ+指小辞の形をとる
ようへい	よう]ちゃん	よう+指小辞の形をとる
かずひこ	ひー]こー、かー]ずー	かーずーは平板でも容認される
かずこ	かー]ずー、かず]こー	

ひろゆき	ゆー]きー、ひー]ろー	
ひろこ	ひー]ろー、ひろ]こー	
けんいち	けんぴー、けんぼー	けん+指小辞の形をとる
こういち	こうちゃん	こう+指小辞の形をとる
いぜな (姓)	いぜなー	
あきら	あきらー、あーきー	前者は男性、後者は女性
さだつぐ	さっつー	
まちだ (姓)	まちだー	
えま	えーまー	
やよい	やよいー、やーよー	やーいーは容認されない
あゆみ	あゆみー、あーゆー、あーみー	
まゆみ	まゆみー、まーゆー、まーみー	
りやこ	りやこー、りーこー	
りさこ	りさこー、りーこー	りーこーは容認度が低い
あずさ	あずさー、あーずー	
りな	りーなー、りっちゃん	
マックス	マーカー、マックー、マーポン	
ジャック	ジャーカー、ジャックー、ジャーぽん	
けんたろう	けんたー、たーろう	
ことみ	こーとー、ことみー、こっちゃん	
かなん	かーなー、かーなん	